カンボジア、アンコール遺跡におけるパブリック・アーケオロジーの実践：1999-2009

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27287

カンボジア、アンコール遺跡における パブリック・アーケオロジーの実践 :1999 ― 2009

丸 井 雅 子
（上智大学外国語学部アジア文化研究室）

はじめに

カンボジアのアンコール遺跡は、1992 年にカンボジアで最初に世界遺産登録された文化遺産である [1]。本稿は、この世界遺産アンコールで 1999 年から実施されている発掘現場の「現地説明会」を事例として紹介し､アンコールにおけるパブリック･アーケオロジーのあり方を考える材料を提供したい。ここで言うパブリック・アーケオロジーとは、地域に根差した「考古学教育」を指す。さらに、グローバルな「文化遺産」としてのアンコール遺跡の特殊な枠組みのなかで、考古学が発信すべきものは何かを考えてみたい。

「現説」は今さら説明するまでもないが、発掘中の遺跡を一般に開放し専門家が作業の状況や成果について公表する説明会のことである。日本は考古学に関心が高い一般市民が多いとされ、話題の発掘現場で開かれる現説は、多くの考古学ファンで大盛況である。

1. 考古学と現代社会の接点

考古学者の説明責任

考古学という学問が最早、専門家（考古学者）だけの特別な領域ではないことを考古学者自身は自覚している。これは単に歴史や考古学好きの一般市民が増えた結果、趣味と学問の境界が曖昧になってきた、ということではない。現代社会においては、考古学者の責務として遺跡、発掘調査、そしてその成果等を広く公開し、一般市民へ向けてのある種の「考古学教育」に積極的に携わることが社会的に求められているからである。敢えて乱暴な表現をするならば、「どれだけ一般市民を巻き込むことができるか」、これによって遺跡や考古学への理解を深めてもらい、遺跡保存の下地を築く。全ては考古学者の力量にかかっている。この点においては、日本もカンボジアも関係ない。

遺跡とそこで実際に進行している発掘調査は、考古学者が一般市民へ遺跡や調査の実態を説明することができる絶好の機会を提供してくれる。田中琢はかつて、考古学と現代社会の関係に言及した論文のなかで､「考古学が社会の中で直截的に現在の市民生活に効用をもたらすことはなく、研究活動が市民の日々の生活と直接的に関係のないところで行われている限りは問題がない。しかし、発掘調査は市民生活や市民社会と密接不可分の関係にあり、発掘調査や研究活動、研究成果の社会への還元が必要となる」といった主旨のことを述べている〔田中 1986:19〕。

この場合の発掘調査とは、すなわち考古学とは無縁な人にも日常の市民生活の中で起こりうる緊急調査を指すと考えられる。このような場合、発掘調査への理解と協力を得るために実施される活動の代表的なものが、現説である。現在の日本では、発掘調査自体に一般市民が主体的に参加することは、かなり難しい状況がある [2]。しかし、その代わり、発掘中の現場を一般に公開し、担当者が調査の状況や明らかになった事柄について説明する。このような発掘調査（＝考古学）と一般市民のあいだの橋渡しをしているのが「現説」であると言えよう。

２. カンボジア、アンコール遺跡群バンテアイ･クデイの現説

世界遺産の中のバンテアイ･クデイ

以下に述べるバンテアイ・クデイ Banteay Kdei という寺院遺跡はアンコール遺跡群の一つであり、アンコール期（802 年－ 1431 年頃）の 12 世紀末頃にジャヤヴァルマン 7 世の治世下に建造された大乗仏教寺院であると理解されている。ここは、1992 年に世界遺産登録されたアンコール遺跡公園内に位置している。世界遺産登録されたということは、公的には保護を前提とした遺跡である。バンテアイ・クデイの場合は、遺跡の外周壁に接する道路を隔てた北側に集落が広がる。遺跡近隣に住む人々は、世界遺産に指定され

た地区のなかで生活し、その森林資源や土地利用等には世界遺産としての制限を受けている。

さてこのバンテアイ・クデイでは、上智大学アンコール遺跡国際調査団 (以下、調査団と記す）が 1991 年から建築および考古学両分野の調査を継続実施している。筆者が初めて参加したのは 1994 年 8 月である[(3)]。アンコール遺跡では、1993 年 12 月以来、各国政府および関係機関によるアンコール遺跡修復保存のための国際調整会議（International Coordinating Committee for the Safeguarding and Development of the Historic Site of Angkor:ICC) が年 2 回開催されている[(4)]。この会議では現場視察がプログラムに組み込まれており、アンコール遺跡公園内の各遺跡で各チームから専門的な修復作業等の説明を受けながら回る。こうした修復現場や発掘調査地の定期視察の他、個人的に現場を訪れて専門家同士意見を交換することはしばしば行われていたことと思う。しかし 1990 年代の後半の様子を今になって思い返すと、現場で説明を担当するのは外国人専門家で、言語は英語あるいはフランス語。現場視察の対象は専門家もしくは政府等関係者が大半であった。

情報公開には 2 つのレベルがあり、対専門家向けの技術や作業のプロセスを検証してもらう役割をもつもの、それから対一般市民向けのいわゆる普及活動という役割をもつもの、と筆者は考える。アンコール遺跡では、様々な事情があったのだがとにかく後者の一般市民向け活動は、殆ど手をつけられていない状況であったといえよう。

初めての現説 1999 年

調査団では、安定した状態で（シアムリアプに 1996 年に「上智大学アンコール研修所」という拠点を築き、1998 年 10 月から 3 人のカンボジア人考古専門家を常駐スタッフとして雇い入れていた）発掘調査を続けるうちに、「日本の発掘現場では当然のこととされる現地説明会を、ぜひこのバンテアイ・クデイでも実施したい。説明はすべてカンボジアの人によるカンボジア語で。」と考えるようになった。

そうして、当時遺跡周辺の集落で活動していた国連ボランティアチームの協力を得て、バンテアイ・クデイ近隣の集落から住民を招待し、第 1 回目現説が開催されたのが 1999 年 1 月 30 日のことである。この日は、小学生のグループと大人のグループに分かれ、バンテアイ・クデイを歩きながらアンコールの歴史、遺跡保存のこと、そして発掘中の現場の説明等を約 1 時間かけて説明した。おそらく、専門家ではないカンボジア人（しかも遺跡のすぐそばの住民達）を対象とした説明会は、カンボジアではこれが初めてであったと思われる。上智大学アンコール研修所のカンボジア人スタッフにとっても、これは初めての経験であった。小学生 46 名、大人 76 名が参加してくれた[(5)]。以後、調査団では発掘調査毎に定期的に現説を開催してきた。ところがこれを根本的に見直さなければならない事態に直面したのであった。

誰のための現地説明会か

2000 年から 2001 年にかけての発掘調査を通じて、バンテアイ・クデイから石の仏像 270 点以上が出土した。ジャヤヴァルマン 7 世期にバンテアイ・クデイに奉納されていた仏像が、王の死後に破壊行為を受けて頭等を失い、それらを一括して穴に埋めた、ということが明らかになった[(6)]。この「大発見」の現場には連日、内外の報道関係者、政府、研究機関等の関係者が詰めかけた。そして、このような他に類をみない「発見」こそ、カンボジアの人たち（地域住民）と現場で共に実感し共有したいと考えた我々は、すぐに現地説明会の準備にとりかかったのである。しかし、実施許可申請のためにバンテアイ・クデイの遺跡保護警察番小屋に出向いたところ、即座にこの申請は却下されてしまった。何が何でも許可できないというのである。「素人（＝地域住民）に中途半端な理解のままに仏像が出土している状況を見せ、後日盗掘団が押し寄せたらどうするのか。（バンテアイ・クデイは、この仏像群の発見時には警察官が 24 時間態勢で発掘現場を警備してくれていたので）たとえバンテアイ・クデイが無事であったとしても、他の遺跡に万が一のことが起こったら、それはバンテアイ・クデイの見学会に刺激されたと誰もが思うであろう。」という理由が挙げられたと記憶している。管轄機関であるアプサラ機構にも相談したが、警察の意見の通りだ、と言われた。

よかれと考えて企画してきた地域住民を対象とした現地説明会。しかしカンボジアの人たちの懸念は別の所にあったのである。そのことにようやく気づかされた出来事であった。

それ以来、長い間、調査団では現地説明会を開催してこなかった。気持ちが萎えてしまった、というのが正直なところだろうか。また、（小学生はともかく）大人を説明会に招待するということは、見方を変えれば「強制的に」連れてきた、と同義かもしれない。働く時間、休む時間を返上してバンテアイ・クデイに来てくれていたのである。

３．文化遺産を楽しむ会

「カンボジアの人と楽しむ文化遺産」として再出発

仏像が発掘されてから 6 年後の 2007 年 11 月 2 日、出土した約 270 点の仏像を専門に収蔵し展示する博物館（プレア・ノロドム・シハヌーク＝アンコール博物館）が完成し、シハモニ国王ご臨席のもと華やかに記念式典が開催された [(7)]。仏像を一括遺物として、ひとつの所にまとめて保管したいという我々調査団の大きな希望が叶えられたのである。翌 2008 年 1 月 2 日から一般向けに正式に開館し、カンボジア政府のアプサラ機構が運営している。ところが先の完成記念式典では、館外には国王や政府要人を歓迎するために近郷近在から呼び集められた大勢の市民や小学生達がいたのだが、残念なことに当日は内覧する機会もなくそれぞれの集落へ戻ったのである。さらに、6 年前に共に仏像を発掘した作業員達、博物館の展示作業に携わってくれた作業員達、彼らもまだ博物館には来ていなかった。開館したばかりのこの博物館を、今、一番見てもらいたい人、それは彼らであった。そこで、久しぶりに、現地説明会（仏像がかつて発掘されたバンテアイ・クデイの現場そして、引き続き博物館を見学する会）をアプサラ機構と共同開催することに決めた〔丸井 2007、久保 2007〕。

内容は現地説明会と変わりないが、博物館へも立ち寄ることから広く文化遺産を理解する会であるという認識のもと「カンボジアの人と楽しむ文化遺産」と名づけて継続的に実施していくことを想定したのである。最初に招待したのは、既に述べたとおりバンテアイ・クデイ調査の作業員として調査団とは密接なつながりを持っているバンテアイ・クデイ北側のロ・ハール集落住民である。2008 年 2 月 26 日朝、バンテアイ・クデイ東門前に集合、遺跡内をカンボジア人スタッフの案内で見学した。集合時間にはまばらであった人影も、遺跡内を歩くうちにその数はどんどん膨れ上がり、博物館へ移動する車輌はすし詰め状態であった。約 160 人のロ・ハール住民が博物館へ移動し、特に発掘や展示に関わった人たちは意気揚々と作業時の事を他の人たちに語っていたのが印象的である。博物館見学の後、上智大学が修復事業に携わっていたアンコール・ワット西参道を見学し、盛りだくさんの見学会は 3 時間程のプログラムを無事に終えて皆を集落へ送り届けた。

博物館における感想を幾つか紹介したい。

40 代男性「大量の仏像が発掘されたとき、噂では聞いていた。しかし現場を見ることができなかったし、その後それらの仏像がどこに持っていかれてどうなったのか全く知らなかった。外国にでも持って行ってしまったのかと思っていた。それが今日、この博物館に来てみたら全てここにあるというじゃないか。驚いた。そして、ここにあっていつでも見に来ることができるようになっていて、ほんとうによかった。」

70 代男性「どうして今日、ここ（博物館）に連れてこられたのかわからない。仏像だったら、寺でいつも拝んでいるのに。」

現場説明会の醍醐味は、直接、人々と対話できる、意見を聞くことができるという点だ。それを大いに実感した日であった。

もっと体験を

博物館開館以来、こうして「カンボジアの人と楽しむ会」をゆっくりではあるが継続開催している。第 1 回目は既に述べたように 2008 年 2 月 26 日、第 2 回目は同年 8 月 30 日 [(8)] に実施した。現地説明会は、確かに人々と直接交流できるまたとない機会である。しかし、「主役は誰なのか」という若干の疑問も残った。もっと参加した人たちが主役になれる企画を考えたい、もっと体験できる内容を・・・。

そこで参加した人が楽しい思い出と共に家に戻ることができるようにと願って「体験学習」を中心に据え、対象を小学生に絞った現地説明会を考えることになった。体験の内容については調査団内、特にカンボジア人（上智のスタッフや王立芸術大学学生達）と我々日本人との間で、意見がかみ合わずに議論を繰り返したが、なんとか一つの方向に収れんさせ、無事に第 3 回目を 2009 年 8 月 29 日に実施する運びとなった。

今回招待したのはサマキ・サハコム小学校、シハヌー

ク博物館から直線距離で 1 キロ半ほど離れている [9]。全校児童数は 146 人で（男女比は 1:1）、その中から児童 100 人と先生 4 人が来てくださった。事前に校長先生と打ち合わせをした。校長先生ご自身も、ここに通う小学校２年生のお嬢さんの母親であり、この「体験学習」を楽しみにしてくださっているようである。この時期は夏休みであるにもかかわらず、先生達は各学年の級長を通じて既に各生徒に集合時間等を連絡してくださったという。有難いことである。また、通常の学期中は世界食糧計画の支援により、子供達に朝食を準備しているとうかがい、現地説明会当日もパンと飲み水を用意することにした。さらに、我々はシアムリアプ州教育・青年・スポーツ局局長へ事前の挨拶にうかがい、事業実施へのご理解を示していただいたと同時に、今後の継続的な活動についての有益な助言を頂戴した。

塗り絵、拓本、ワークシート

当日の「楽しむ会」の内容は次のとおりである。朝 8 時に小学生達を迎えに行き、先ずバンテアイ・クデイへ。バンテアイ・クデイの東門前で筆者は上智側代表として皆に挨拶をしたが我々日本人の出番はそこだけ。後はすべてカンボジア人スタッフと学生達に任せた。その後、学年毎にグループに分かれ、王立芸術大学学生達の案内により遺跡内を歩く。仏像がかつて発掘された場所でも立ち止まり、「今みんなが立っているその下に仏像が埋まっていたんだよ。この後、その仏像が展示されている博物館に行くからね。」と説明すると、小学生たちはきょとんとしている。また、ちょうど別の箇所を発掘調査中でもあったので、発掘現場で遺構を見ながら「何をやっているのか」、「何がわかるのか」、「何が見つかったのか」等の説明を受けた。質問も活発に出ている。学生達も事前に予行演習をしたり図を準備したり、平易な説明に努めている。バンテアイ・クデイでは 40 分ほど過ごし、おやつの飲み水とパンをもらって博物館へ移動した。

博物館では、学芸員による館内案内の後、低学年、中学年、高学年、の３つのグループに分かれて、それぞれ「塗り絵」、「拓本」、「ワークシート」に取り組んだ。最初は、紙とクレヨンを目の前にして戸惑っていた児童も、やがて周囲の様子をうかがいながら自由に色をつけていた。最後は皆で記念撮影。別れ際に、ある小学生が私に向って「先生、ありがとうございます」と言ってかわいい手を合わせてくれた姿が忘れられない。

これからの「楽しむ会」

今後も、このような形で遺跡と博物館を結んだ「カンボジアの人と楽しむ文化遺産」を続けていくつもりである。対象は、しばらくの間は小学生に的を絞ることになるかもしれない。この種の体験学習や校外学習について、小学校側からも大きな期待が寄せられ、さらに実際に一定の評価を受けたからである。博物館を利用して、もっといろいろな活動に取り組んでみたい。かつて筆者は口頭伝承採集調査に携わったことがあった〔丸井 2001〕。遺跡や歴史にまつわる昔話を覚えているおじいさんやおばあさんを呼んで、子供たちに語り聞かせる会、そんなものがあってもいいだろう。しかし、カンボジアで実施するにあたっては、企画や運営の段階で様々な労苦を伴うのが正直なところだ [10]。それだけに小学生や先生達から返ってくる反応の大きさと手ごたえは喜び以外のなにものでもない。

カンボジアの学校教育における歴史教育はいまだ教材や内容に不足な点が多いと聞く。しかしそのような状況においても、アンコールの歴史は、栄華を極めた「国の歴史」として大きく扱われている。一方で、アンコール遺跡に近接した地域に暮らす人々にとっては、アンコール遺跡の歴史は自らの「郷土史」でもあるはずだ。学校教育に介入することは不可能である。しかし、アプサラ機構、関係機関（教育局等）と連携することで、継続的により多くの小学生にこのような課外授業としての体験学習の機会を提供できればと考えている。

４．「世界遺産」から「地域の財産」として

埋蔵文化財の保存と活用：クメール陶器とタニ窯跡群の調査

これまで説明してきたバンテアイ・クデイは、現在も地上に建造物が残る遺跡である。しかし埋蔵文化財の場合はどうであろうか。アンコール遺跡研究史上、カンボジア国内における初の窯跡調査となったタニ窯跡群は、1995 年に発見された。タニ窯跡群がある地域は長い間クメール・ルージュ軍に支配されていたが、1993 年にカンボジア王国が再興されカンボジア

政府軍が領土を回復、村人が次第に元の居住地に戻りつつあった頃に発見された、という経緯をもつ。考古学的調査が入る以前に、既にこの窯跡群からは大量のクメール陶器が盗掘され、骨董市場に流れていた。その後、1996 年 8 月から本格的な考古調査が開始され、その成果は報告書としてまとめられている［青柳、佐々木編 2007］。

タニ窯跡のような埋蔵文化財については、田畑幸嗣が“「見た目」の悪い遺跡”としてその調査と保存活動に関して論じており、いわゆるアンコールの寺院遺跡と好対照の事例を提供している［田畑 2010］。しかし田畑も述べているように、タニ窯跡群ではその保存活動が首尾良く機能し、現在では遺跡破壊や盗掘も無くなり現地には窯跡博物館も開館するなど、決して観光資源とはならない文化遺産保存と活用の先鞭をつけることとなった［田畑前掲書：191］。そしてその鍵を握るのは、ここでもやはり地域の人々、地域の歴史と文化であると考えられる。

世界遺産アンコールの場合

1992 年に世界遺産登録されたアンコール遺跡は、国際的な協力支援体制という旗印のもとで遺跡のあちこちで修復や調査等が進められている。また、世界的な観光地として名を馳せるアンコールは、「文化遺産産業」〔シャドラホール 2005:4〕に格好の材料を提供している。それだけに考古学が発信する情報には、大きな責任が伴う。

内戦を経て、国家復興の旗印として掲げられてきたアンコール遺跡は、「世界の遺産」である意義と機能が強調され続けてきた。グローバルな文化遺産の側面が先走りし、地域の人々の思いは取りこぼされてきた感がある。

先に述べたが、アンコール遺跡に暮らす人々にとってアンコールの遺跡や歴史は、自分達の郷土史である。アンコール遺跡はまさに「郷土史に親しむための生きた教材」なのである。しかし、グローバルな文化遺産の勢いに押され、ローカルな郷土史への関心はいまだ発展途上である。アンコール遺跡自身が包括する、ローカルとグローバルの連関、そしてそこから生じる葛藤に対して、考古学が具体的にどのように取り組むことができるのかが問われている[11]。郷土史としてのアンコール遺跡を再認識し、そして地域住民と共に生きるアンコールの保存や活用方法を提示する、それらは必ずしも世界遺産であることを否定するものではない。むしろ世界遺産アンコールを、地域の力でより魅力的にできるはずだと確信している。パブリック・アーケオロジーこそ、こうした地域の力を覚醒させる有効な手段である。

註

(1)　2008 年にはアンコール期の寺院遺跡の一つであるプレア・ヴィヒア Preah Vihear が、カンボジア第二の世界遺産として登録されている。

(2)　ここで述べる「主体的に関わる」とは、発掘調査の計画を策定し実際の調査を主導していくこと、と考えたい。

(3) 筆者個人のことであるが、1994 年以後、留学生として 1995 年 10 月から 1997 年 7 月にかけてプノンペンに、ふたたび 1997 年 11 月から 2003 年 3 月までプノンペンおよびシアムリアプに滞在し、発掘調査を始めとする調査団の事業に携わった。当時の各国による現地視察の状況等はこの期間の個人的な印象と所感であることを、予めお断りしておく。拙稿「文化遺産保護と地域社会－カンボジア、アンコールの経験から」『軍縮問題資料』333、2008 年 8 月号、宇都宮軍縮研究室・軍縮市民の会、も参照されたい。

(4) 現在（2009 年）も年 2 回開催されているが、開催地はいずれもシアムリアプである。

(5) この記念すべき第 1 回目の現地説明会についての詳細は、拙稿「考古班人材養成プロジェクトのあゆみ」『アンコール遺跡の考古学』連合出版、2000 年、に詳細を記述してあるので、参照されたい。

(6) この仏像発掘に関しては、次の文献を参照されたい〔丸井 2005、上智大学アジア文化研究所編 2002、上智大学アジア人材養成研究センター編 2003、中尾他 2004 等〕。

(7) シハヌーク博物館は、イオン 1％クラブから建設資金をご寄附いただいた。詳しくは、〔三輪、阿部 2009〕をご覧いただきたい。

(8) 第 2 回目、第 3 回目は、上智大学学生の「緑陰講座」参加者も参加して「楽しむ会」の運営を補助した。緑陰講座については、〔丸井 2008、本吉、中澤 2008〕に詳細が載っている。

(9) この小学校の選定、および後述するシアムリアプ州教育局局長への紹介等については、JICA シニアボランティアの楠輝義氏にたいへんお世話になった。楠氏は、シアムリアプ州教育・青年・スポーツ局において、教育計画顧問を務められている。この場をお借りして心より御礼申しあげる。

(10) 費用負担はすべて実施責任者（今回は、上智大学）が負担している。例えば、移動用の車輌借り上げ費用、飲水やパン購入費用、体験学習用各種文房具等。

(11) 拙稿 2006a,b 等を参照されたい。

参考文献

青柳洋治、佐々木達夫編 2007 年『タニ窯跡の研究－カンボジアにおける古窯の調査－』連合出版

久保真紀子 2007 年「シハヌーク・イオン博物館見学会開催報告 (2) －地域密着型の博物館をめざして－」『カンボジアの文化復興』23 号、上智大学アジア人材養成研究センター、78 － 85 頁

ティム・シャドラホール 2005 年（翻訳 : 松田陽）「パブリック・アーケオロジー：その考察領域および 21 世紀における発展」『文化遺産の世界』17（特集：発信する遺跡 (I) 英国のパブリック・アーケオロジーの潮流から）、国際航業株式会社文化事業部、2 － 6 頁。

上智大学アジア文化研究所編 2002 年『カンボジアの文化復興』19 号（－バンテアイ・クデイ遺跡出土の廃仏 274 体研究および出土仏像・千体仏石柱目録特集－）

上智大学アジア人材養成研究センター編 2003 年『アンコール遺跡を科学する』第 10 回アンコール遺跡国際調査団報告会：アンコール・ワットの謎に挑戦－ 274 体の廃仏が語る王朝末期の歴史－

田中琢 1986 年「総論－現代社会のなかの日本考古学－」『現代と考古学』岩波講座日本考古学 7、岩波書店、1 － 30 頁

田畑幸嗣 2010 年「見た目」のわるい遺跡を保存する－観光資本にならない遺跡の調査と保存活動『グローバル / ローカル－文化遺産』上智大学出版、180 － 193 頁

中尾芳治、上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、荒樋久雄、丸井雅子 2004 年「アンコール遺跡群バンテアイ・クデイ寺院の発掘調査」『日本考古学協会第 70 回総会研究発表要旨』日本考古学協会、267 － 269 頁

中澤良太、本吉友里恵 2009 年「10 年目を迎えた緑陰講座（2）－ 2008 年度緑陰講座に参加して－」『アンコール遺跡を科学する』第 14 回アンコール遺跡国際調査団報告会、上智大学アジア人材養成研究センター、36 － 41 頁

文化財保存全国協議会編 2006 年『新版遺跡保存の事典』平凡社

丸井雅子 2000 年「考古班人材養成プロジェクトのあゆみ」『アンコール遺跡の考古学』連合出版、274 － 288 頁

― 2005 年「仏像埋納坑を読む」『アンコール・ワットを読む』連合出版、155 － 200 頁

― 2006 年 a「世界遺産と共存する重荷－遺跡保護と地域住民－」『カンボジアを知るための 60 章』明石書店、272 － 275 頁

― 2006 年 b「遺跡が直面する変化－観光によって変わる環境－」『カンボジアを知るための 60 章』明石書店、366 － 371 頁

― 2007 年「シハヌーク・イオン博物館見学会開催報告（1）－カンボジアの人と楽しむ文化遺産第 1 回現地見学会－」『カンボジアの文化復興』23 号、上智大学アジア人材養成研究センター、75 － 77 頁

― 2008 年 a「文化財の保存と公開－アンコール遺跡群バンテアイ・クデイを事例に－」『日本考古学協会第 74 回総会研究発表要旨』日本考古学協会、172 － 173 頁

― 2008 年 b「文化遺産保護と地域社会－カンボジア、アンコールの経験から」『軍縮問題資料』333、宇都宮軍縮研究室・軍縮市民の会、39 － 47 頁

― 2009 年「10 年目を迎えた緑陰講座（1）－新しい文化遺産教育の始まり－」『アンコール遺跡を科学する』第 14 回アンコール遺跡国際調査団報告会、上智大学アジア人材養成研究センター、33 － 35 頁。

― 2010 年「遺跡と共に生きる文化遺産－バンテアイ・クデイ現地説明会の 10 年」『グローバル / ローカル－文化遺産』上智大学出版、161 － 179 頁

三輪悟、阿部千依 2009 年「シハヌーク・イオン博物館建設－文化遺産教育の場としての博物館活動に向けて－」『アンコール遺跡を科学する』第 14 回アンコール遺跡国際調査団報告会、上智大学アジア人材養成研究センター、43 － 66 頁

1. バンテアイ・クデイ東門

2. 現地説明会を見学する小学生

3. 発掘現場を見学する小学生

4. 塗り絵に挑戦する

5. タニ窯跡博物館

6. タニ窯跡分布